シンポジウム　「舞踊のフロンティア」

司会者から

尼ヶ崎　彬

シンポジウム「舞踊のフロンティア」は若松美黄氏により企画されたものである。ただ若松氏は提題者の一人でもあるので，代わって当日司会の役を務めた尼ヶ崎が本報告を執筆する。

「舞踊のフロンティア」とは，これまで「舞踊」ないし「ダンス」の言葉で考えられてきた，あるいは研究されてきた対象と，そこから外れてきた対象との境界線であり，その境界線の向うにある現象に目を向けることによって舞踊概念や舞踊研究の新たな領域を探っていこうというのが，このシンポジウムの趣旨である。

とは言え，境界線というのは国境線と同様四方八方にあって，どちらへ歩いても必ず境界線にぶつかる。問題はいくらでも発掘できるだろう。わずか数時間のシンポジウムですべてに目配りした議論はできるはずもない。いわば今回はその手始めであって，今後も継続してこのようなシンポジウムが行われるのが望ましい。

さて今回選ばれたテーマは，多くの人が認識しているジャンルの境界，テクノロジーのもたらした表現媒体の拡張，そしてなぜかあまり言及されて来なかった身体条件の問題である。

舞踊ジャンルの問題については，第一に何が舞踊であり何が舞踊でないかという境界線の問題がある。次に舞踊とされるものの中で，芸術舞踊と非芸術舞踊の境界がある。儀式舞踊，民俗舞踊，アマチュアの稽古事，商業的エンタテイメントなどがこの境界線を出たり入ったりしている。さらに，そもそも「芸術」と「非芸術」という分類自体に問題があるのではないかという視点が，近代的枠組を反省し解体しようとする今日の思想状況の中から生まれている。なぜならこの分類は，もともと西欧近代の「芸術」形態を模範とし，そこから外れるものを（非西欧の芸能はだいたい外れるのだが）民俗芸能とかアマチュアの趣味とか消費される商品などと分類してきたからだ。この問題については，近年の文化研究（カルチュラル・スタディズ），「芸術」概念を再検討する美学，ポストコロニアリズムなど多様な立場からの論究が可能である。久万田晋氏は「沖縄ポップの現在」と題し，まさに沖縄ポップが含む多様な問題を指摘してアクチュアルな提題を行った。第一に沖縄ポップはその音楽的特徴を「沖縄イメージ」として沖縄外部に対してブランド化していくと同時に，沖縄県民自身に対してもそのイメージを「民族アイデンティティ」として再確認させる機能をもつ。第二にそのイメージは一方で想像上のユートピア（の創造）に向かうと同時に，他方では土着的なもの（の再発見）へと向かう。第三に土着的なものへの指向がエイサー舞踊の導入につながり，さらにこれが新しいエイサー形態と結びつき，エイサー団体の側が沖縄ポップを導入するという相互現象がみられる。第四にポップ化したエイサーはよさこいソーラン等の本土の類似現象と呼応し，じっさいに交流し，さらなる展開をみせつつある。第五にポップ化という視点からみるとき，よさこいソーランや沖縄エイサーにみるごとく，音楽と舞踊というジャンル区分さえ重要ではないかもしれない。

表現媒体の問題から提題を行ったのは松澤慶信氏である。演題は「映像媒体の可能性――ダンス表現の新しい地平」。楽器の技術革新が作曲家に新たな可能性を与えたように，ビデオの技術革新とその普及はダンスにどのような影響を与えたか，また与える可能性があるかは，多くの人が関心をもっている。松澤氏は事態が一般に思われるほど単純でないことをさまざまの観点から指摘した。まずダンスを映像化した「ダンス・ビデオ」だけでなく逆にビデオがダンス的特徴をそなえることで「ビデオ・ダンス」と呼ばれる作品が生まれていること，ダンスの映像化が進むにつれ映像ではわからないダンスの諸要素が明らかになってきたこと，そこからダンス固有の原理を探ることができること。つまりビデオの出現は単にダンス周辺の表現形態を拡張しただけでなく，元来のダンスについて根本的に再考するための資料を提供しているということである。

「踊る身体のフロンティア――窮地のインスピレーション」と題してユニークな観点から提題を行ったのは若松美黄氏である。見事なダンスを踊るためにダンサーは身体を完全に統御しなければならない。その統御の技術や力量について語られることはあっても，統御に不利な条件について語られることはあまりなかった。ところが若松氏は，傷害や風邪などによって身体に制約が課せられたときかえってよいダンスが生まれる条件となりうることを実例によって示し，正常に踊れるか踊れないかという窮地がまさにフロンティアとして機能することを論じたのである。

提題はいずれも重要な問題を新鮮な視点によって提示し解析したもので，後の議論はどれか一つに絞ったほうが成果は高かったかもしれない。しかしあまりにも興味深い問題が多かったため，質問・意見は多岐にわたり，個々の議論を深めることはできなかった。そのかわり多くの出席者にそれぞれの問題関心にしたがって大きな刺激を残したと思われる。